文芸特集

たくさんの力作の中から選ばれた秀作の一部を紹介します。限られた字数の中に織り込まれた、さまざまな思いや季節の情緒を味わってみてください。

短歌

金子富美子　選

一席

見えるものみんな色ある美しさ飛行機雲が青空をわる
芝高木2　森田富美子

評　花や緑ばかりではなく、人も動物も、空も雲もみんな美しい色をまとっているという。見上げればいま、白い飛行機雲が一直線に伸びて空の青をわっている。

落人の首祀られし川岸の塚に今年も百合の花咲く
安行領根岸　菅野　孝仁

春の日に黄色いビオラのあふれ咲く今日はみゆちゃん卒園式ね
上青木3　岩﨑モト子

ガラス戸に影の飛び来て囀(さえず)れり朝の薬をしばし忘るる
芝新町　荒木　信子

カフェオレが胃に届きゆくその時間浴びし言葉の棘を抜きをり
川口1　川久保良治

消費税上がると聞かばそわそわとチラシの広告あれこれ見つむ
幸町1　板橋　豊子

コンビニの魔力は強しひと品を求めるつもりがこんなに買ってる
榛松　木村　昌子

電柱に「除染作業員募集」貼り紙あり春一番の吹きすさぶ中
坂下町3　神谷安久子

パン一つ牛乳一本震災を忘れぬためのわたしの昼食
領家3　中川　美穂

無精ヒゲに白きも混ぜてわが似顔描きたる孫がハナマルもらう
安行原　山田　英一

身のほどにそぐわぬ夢のあれやこれ僅か叶いて身は老いにけり
宮町　田中　澄子

このままで終わるはあまりに淋しいと別のわたしがけしかけてくる
朝日3　髙松　幸江

三月の夜の車窓に写るわれ今別れ来し姉に酷似す
芝下2　小林　雅子

父の作りし青葱うまし自転車に届け来たりてすぐ帰りしか
北園町　松本　京子

芝川の土手の辛子菜籠に摘む戦時下なれば一日の糧
上青木1　石塚　栄

職求むやっと見つけた定職が定年のない「ゴミ出し修業」
安行慈林　吉川　正秀

俳句

山﨑　十生　選

一席

いつだって前を見据える梅の花
川口1　小安　章代

評　梅の花は、「花の兄」とも言われ、春の先駆けの花で『万葉集』には、桜の倍以上の歌がある。派手さはないが、つつましやかで春を告げる花としてふさわしい。一席の作品は、花のリーダーとしての自覚がみなぎっている。

大屋根の続く寺町犬ふぐり
鳩ヶ谷本町2　市川　和夫

病床の父の視線は春障子
芝1　氏家　輝雄

モネ展を出て夕映えの春の池
川口4　牛島千鶴子

あの春のあの海悲しこの海の
安行出羽2　大江　恵一

教室に笑ひひびきし日の永き
幸町1　小川　敦子

眼を病みてひびく言の葉水仙花
戸塚東1　久須美節子

せせらぎの八丁堤草青む
桜町4　小林　重人

カプチーノ窓いっぱいに紅椿
戸塚境町　鈴木　勝美

芽吹き初む木々を見上げて深呼吸
芝高木2　田鎖　和子

春キャベツ甘し安行道の駅
本町1　知念　哲夫

良く回るペットボトルの風車
石神　徳丸美也子

祖母の杖借りて登りし夏の富士
南町1　野本　貞義

突然の春雷庭木かなしばり
朝日5　宮川　照子

夜桜にライトアップの物の怪よ
領家2　矢作　恵

川柳

新井　愁思　選

一席

逝き急ぎ市民見守るキュポ・ラ星
朝日5　掘　晋

評　前市長の岡村氏が黄泉へ発たれて百余日。追慕の念を宵空に放った心情をリアルに凝縮。座語に編み出した「キュポ・ラ星」は作者にして為せる当意即妙の世代の代名詞である。

戦争の修羅を語らぬ車椅子
鳩ヶ谷本町3　加藤　レイ

白地図と思いのままに独り旅
西川口2　松岡恵美子

今こそと絆の語意が背を叩く
飯塚2　川瀬伊津子

良い事があって全身毬となる
東内野　小石　リコ

おばろ夜に過去のテープが廻り出す
川口4　富田千恵子

年金の余生むさぼる消費税
上青木西4　星野　良一

逝く人に待ったをかける高福祉
東川口2　星野　直康

一台のテレビ夫婦の子守り役
安行領家　原澤かね子

部屋干しをお願いしてる鯉のぼり
上青木4　星野　明美

老人の脚では追えぬカタカナ語
安行領根岸　堀口　弘一

※文芸特集は年1度の掲載を予定しています。
次回の募集は広報かわぐちでお知らせします。
問い合わせ…広報課　☎048-259-7628　FAX048-258-5661